

「雲」に託す鷗外と漱石の思い

『青年』と『三四郎』との比較を通して

THE SENSE CONVEYED IN THE WORD “CLOUD” IN OGAI AND SOSEKI

A Comparision of *Seinen* and *Sanshirô*

曾 秋 桂*

Ogai wrote about ‘clouds’ frequently in his diary. In a previous paper I clarified the difference between the classical Chinese poems of Ogai and Soseki on this score. It concluded that while Ogai visualized the ‘cloud’ Soseki conceptualized it.

The word ‘cloud’ appears frequently in Ogai’s novels, a total of 185 times in fact. If examples of its use in personal and place names in the historical novels are subtracted from the total 33 instances remain. It is particularly noteworthy that these last occur with particular frequency in *Seinen*. In this paper I will inquire into the usage of the word ‘cloud’ in *Seinen* and compare it with its usage in Soseki’s *Sanshirô*, a work which is often contrasted with *Seinen* in literary history and thereby try to clarify the difference between the senses conveyed by that word in Ogai

* TSENG Chiu Kuei 台湾淡江大学助教授。広島大学大学院社会科学研究科で学術博士取得。論文に「夏目漱石の漢詩と小説のかかわり－『三四郎』における「雲」(『国際日本文学研究集会会議録』13)がある。

and Soseki.

I have decided to conduct this investigation making the appearance of the 'cloud' in *Seinen* the main axis and its use in "Ueno no Yama," the place where the cloud appears in the novel, the secondary axis. I conclude that the word 'cloud' was introduced as an index in order to describe the landscape of Jun'ichi's mental image. It can also be said that the word 'cloud' is used as a symbol of Mrs Sakai, a character who bewitches Jun'ichi. And we can conclude that in the development of the relationship between Jun'ichi and Mrs Sakai 'cloud' plays the role of a keyword.

As a keyword in *Sanshirô* 'cloud' is used throughout as an index of the developing relationship between Sanshirô and Mineko. At the same time we must also acknowledge that 'cloud' is a symbol of Mineko, the object of Sanshirô's longing.

The above two works share the use of 'cloud' as a symbol of the object of their protagonists' interests.

The special quality of 'cloud' in the two works differs however. While 'cloud' in *Sanshirô* merely indicates the simple object of longing, in *Seinen* it does that and additionally indicates the object of a temptation which includes the meaning of a struggle of the protagonist's reason, something of a composite.

We can not say with confidence that Ogai, on reading *Sanshirô*, saw through the role being played by the word 'cloud' and introduced it into his own work *Seinen*. However, considering that *Seinen* is the only novel of Ogai's in which 'cloud' is a distinctive expression, we can say that the role played by 'cloud' in *Seinen* results in it resembling the role played by that word in *Sanshirô*.

Consequently, we must admit that these two works are intimately related in this point and at the same time that a delicate distinction is evident in the use of this word by Ogai and Soseki. Both share a particular concern with the word 'cloud' and employ the technique of expressing the object of longing in the guise of a 'cloud'.

一 始めに

鷗外の日記には、「雲」がよく記述されている^①。筆者は以前、この点を含めて考えた上で、漢詩における鷗外と漱石との違いを明らかにした^②。そこでは、憧れの対象を「雲」に託して表現する所に両者の共通点が見られる一方、鷗外が目で「雲」を見ているのに対して、漱石は頭で「雲」を考えているという相違点が見出された。

一方、鷗外の小説作品の中にも、「雲」はしばしば登場する。「雲」の用例を鷗外の全小説作品を対象にして調査してみると、表（一）の通り、「雲」の用例は延べ185箇所ある。そのうち、史伝小説などで多用された人名や場所などの固有名詞を除くと、残りは33箇所である。その中で、『青年』は、特に「雲」への言及が多い作品であり、注目すべきものである。そこで、本発表では『青年』を取り上げ、そこにある「雲」の用法を究明し、さらに、『青年』と文学史上しばしば対比的に論じられる漱石の『三四郎』における「雲」の用法との比較を通して、「雲」に託す鷗外と漱石の思いの違いを明らかにしようとした。

二 『青年』における「雲」

『青年』には、「雲」が9回ほど登場している。それらが『青年』の全体構成において、該当する所を表（二）にした。そして、その登場している「雲」の内容を表（三）に纏めた。表（三）の通り、例3「神経興奮の雲」と例8「憂悶の雲」のように、人間の情緒的な部分までに割り込んだ表現が見られる。また、「雲」と「日の光」の加減については、かなり込み入った描写がされて

いる。

1. 「雲」をめぐる（第一回目から第四回目まで）

次は、「雲」を中心にして、『青年』を見ていく。まず、「壺」に始めて登場する「雲」を見よう。

①灰色の雲のある處から、ない處へ日が廻つて黄いろい、寂しい暖みのある光がさつと差して來た。坂を上つて上野の一部を見ようか、それでは餘り遅くなるかも知れないと、危ぶみながら佇立してゐる。（p279-280 傍点筆者）

ここでは、主人公の小泉純一が作家の大石路花を訪ねに行ったが、路花がまだ就寝中なので、起きるまで待っている間に、散歩に出た場面の描写である。ここの「雲」は天気に関する描写として読み取ることができる。しかし、注目されるのは、傍点部の〈上野の一部を見よう〉という表現が、「雲」の描写のすぐ後に見られることである。同じ「壺」では、ほかの一箇所にも、

②純一は坂の上で足を留めて向うを見る。

灰色の薄曇をしてゐる空の下に、同じ灰色に見えて、しかも透き徹つた空気に浸されて、向うの上野の山と自分の立つてゐる向うが岡との間の人家の群が見える。（p277 傍点筆者）

という表現がある。①では純一は「佇立してゐる」とあるが、②でも「足を留めて」とあるように、純一は動きをとめている。②では距離は遠いにも変わらず、上野の山に対する関心を持っている純一の態度が特に目を引くものである。その関心は①の〈上野の一部を見よう〉という表現に通じるものといえよう。また、②には「灰色の薄曇をしてゐる空」という表現に対して、①では「灰色の雲のある處」とあり、この表現が似ていると言える。詳しくは「上野の山」の意味に関する次項の所で述べるが、「雲」を主軸とすると、それに深くかわる副軸として、〈上野の山〉が他の部分にも表れてくるのである。随時、指摘しながら「雲」の用法を見ていくこととする。

第二回目に「雲」が登場するのは、次の所である。

③そこで畫家は死に瀕してゐる。體のうちの臓器はもう運轉を止めようとしてゐるのに、畫家は窓を開けさせて、氷の山の顛に棚引く雲を眺めてゐる。
(p299 傍点筆者)

とあるように、死のうとする畫家は、氷の山の顛に棚引く「雲」を見つめて、あくまでも自然に取材を求める態度を現わしている。これに対して、純一は〈藝術はこうしたものであらう〉(p299)と頷く反面、自分自身にして見れば、〈自分の畫がくべきアルプの山は現社會である〉(p299)と、画家の態度と相反じて、現実の社會に材料を求める意欲を見せる。このような純一の事である以上、きっと画家の眺めている「雲」と異なっている「雲」を純一は見ているに違いない。ここでは、純一には自然の「雲」とは異質の「雲」が存在していることに注目したい。

それから、第三回目に登場する「雲」を見よう。これは、純一が坂井夫人と関係が出来たことを、回想して日記に纏めた形で再現する所である。

④あの時己は理性の光に刹那の間照らされたが、齒牙の相撃たうとするまで
になつた神經興奮の雲が、それを忽ち蔽つてしまつた。その刹那の光明の消えるとき、己は心の中で、「なに、未亡人だ」と叫んだ。(p344 傍点筆者)

ここには、「理性の光」に対し、「神經興奮の雲」という表現が見える。これについては、次の二点が言える。

第一点——「理性の光」を忽ち蔽ってしまうものを、「神經興奮の雲」と表現する所から、「雲」は理性の制御に対して、マイナスの動き掛けを持つものである。前述したように、純一には画家の眺めている「雲」と異なる「雲」があるという点と、この点を一緒に考えると、純一が現実社會を描こうとする藝術の道を取る場合、その理性の制御に対して予想される様々な障害、誘惑を総じて「雲」と表現している事にならう。換言すれば、純一に見られる異質な「雲」とは、純一を迷わせる要素を持つのであ

り、これによって引き起こされる様々な障害・誘惑である。

第二点 ― 傍点部の〈あの時〉とは、純一が坂井夫人と関係し、童貞を失った時を指す。有楽座で坂井夫人に出会って以来、純一の心はその坂井夫人に惑わされ、ついに彼女と肉体関係が出来た。このように、現実社会を描こうとした純一を振り回す主体とは、とりもなおさず坂井夫人のことである。そうすると、先に第一点で明らかにした純一を迷わせる要素を持つ「雲」と坂井夫人とは、切っても切り離せない密着な関連があると言えよう。初めて坂井夫人と性的関係を持った純一は、反省を重ねて〈あの坂井夫人は決して決してその戀愛の対象ではない〉(p342)と自己分析をし、その上で、〈なに、未亡人だ〉(p344)と叫んだ。このように、純一は理性による自己認識をしている。そして、直面した「男子の貞操」「女性観」の諸問題を友人の大村莊之助に持ち出した。

⑤女には戀愛といふやうなものはない。娼妓の型には色欲がある。母の型には繁殖の欲があるに過ぎない。戀愛の対象といふものは、凡て男子の構成した幻影といふのです。(p365)

という大村莊之助の返事を聞いた途端に、〈坂井の奥さんが娼妓の型の代表者として彼れの想像の上に浮〉(p365)とある。純一は坂井夫人の正体を理性では見破った。だが、坂井夫人の正体を見破った一方で、坂井夫人に引き寄せられることもよく分かっていた。そこで、純一はその矛盾に苦しむことになる。こうした気持ちのもとので、第四回の「雲」が登場する。

⑥鴉が一聲啼いて森の方へ飛んで行つた。その行方を見送れば、いつの間にか鼠色の薄い雲が空を掩うてゐた。(p368 傍点筆者)

これは、一見してごく普通の夕方の風景描写に過ぎない。しかし、「鴉」を登場させる意味と絡ませて考えると、これは単なる風景描写に止まらないことに気がつく。まず、「鴉」から解明しよう。

「鴉」は、先に女性観の話から、場所を氷川神社に変えてから始めて登場するものである。鴉が神社にいるというごく自然な場面設定の中で、次のような会話が交わされている。

⑦それに鴉が一羽止まつてゐる。こつちを向いて、黒い圓い目で見て、紫色の反射のある羽をちよいと動かしたが。また居ずまひを直して逃げずにゐる。

大村が突然云つた。「まだ何も書いて見ないのですか。」

「ええ。蜚ばず鳴かずです」と、純一は鴉を見ながら答へた。

(p367 傍点筆者)

ここで注目したいのは、大村の質問に答えた時に、「鴉」を見ながら返事したという純一の動作である。引用文にあるように、鴉が止まっていて居ずまいを直したが、逃げずにいる。この様子は、まさしく純一が〈蜚ばず鳴かず〉と言った通りである。また、〈蜚ばず鳴かず〉という裏には、“一たび飛べば、空高く舞い上がり、一たび事を行えば、人を驚かす”という純一の強い自負心がある。ここでは、「鴉」の立ち居振る舞いと純一の現状とが重ねて描かれていると言えよう。こうして、純一の現状と「鴉」の立ち居振る舞いととの重なり合いは、〈鴉が一聲啼いて森の方へ飛んで行つた〉(p368 傍点筆者)によって、始めて崩された。純一の現状を表わすには、最も適切な「鴉」が、今、純一を置き去りにして、啼いたり飛んだりしている。この、自分を後に残して啼いて飛んで行つた「鴉」を見送る純一の気持ちは、さぞ寂しく未練の残るものであったろう。一方、まだ何も書けない自分のことを省みると、純一には、情けない気持ちがないとは限らない。今、純一が何も書けない理由を想像してみると、そこには坂井夫人の影が潜んでいると察せられる。その理由は、先に見たように、純一が坂井夫人の正体を知っていながら、彼女に引き寄せられ、惑わされるという矛盾に直面しているからである。

以上、「鴉」の含む意味と合わせて考えてみれば、〈いつの間にか鼠色の薄い雲が空を掩うてゐた〉のくだりは、ただの夕方の風景描写というよりも、純

一の心象風景として読んだ方が正解だと思われる。

第五、六回目の「雲」が同じく「十四」に登場する。

⑧雲の絶間から、傾き掛かつた日がさして、四目垣の向うの檜の影を縁の上に落してゐたのが、雲が動いたので消えてしまった。(p375 傍点筆者)

実はこの文は、お雪の訪問を受けた後、20日間も費やして坂井夫人の所へ行くか行くまいかと、いろいろと悩んだ結果、やはり足を坂井夫人の家の方へ運んだ純一の行動を説明するのに、重要な鍵を握っている。これに関して、次は視点を変えて、前述の〈上野の山〉という副軸から問題点に迫っていくことにしたい。

2. 「上野の山」が描かれる意味

何故、改めて〈上野の山〉に注目したいかと言うと、お雪の訪問について、〈純一が夜上野の山を歩いた翌日〉(p373)と、わざわざ「上野の山」と明示しているからである。坂井夫人の方へ再び足を運ぶ純一の行動を解くには、お雪の訪問が重大な鍵を握っていると同時に、〈上野の山〉を歩いたことの設定も無視できないのである。

さて、ここまで出てきた〈上野の山〉に関する用例を纏めておく。

I 向こうの上野の山と自分の立つてゐる向うが岡との間の人家の群が見える。(p277)

II 坂を上つて上野の一部を見ようか、それでは餘り遅くなるかも知れないと、危ぶみながら佇立してゐる。(p280)

以上は「壺」にある。

III 前日には大石に袖浦館の前で別れて、上野へ行つて文部省の展覧會を見て歸つた。その時上野がなんとなく氣に入つたので、けふは新橋から真直に上野へ來た。博物館の門に突き當つて、根岸の方へ行かうか、きのふ通つた谷中の方へ行かうかと暫く考へたが、大石を尋ねるに便利な處をと思つてゐるので、足が自然に谷中の方へ向いた。(p290-291)

「参」

IV二人は初音町を出て、上野の山をぶらぶら通り抜けた。(p304)「六」

V「さうさ。僕もまだ極めてはゐないのです。兎に角上野から汽車に乗ることにするさ。」

「もうすぐ午ですね」

「上野で食つて出掛けるさ。」

(p352)「十一」

VI二人は山を横切つて、常盤華壇の裏の小さな坂を降りて停車場に這入った。(p358)「十二」

VII急に思ひ立つて、人気のない上野の山を薩摩下駄をがら附かせて歩いたこともある。

或るさういふ晩の事であつた。(中略)死せる都會のはづれに、吉原の電灯が幻のやうに、霧の海に漂つてゐる。(中略)純一の視線は根岸の人家の黒い屋根の上を辿つてゐる。坂の両側の灌木と、お靈屋の背後の森とに遮られて、根岸の大部分は見えないのである。(p372)「十四」

VIII己はラシイヌを手にもつて、當てもなく上野の山をあちこち歩き廻つてゐるうちに、不安の念が次第に増長して來て、脈搏の急になるのを感じた。(p381)「十五」

IX支度をして待つてゐた純一は、瀬戸と一しよに出て、上野公園の冬木立の間を抜けて、廣小路で電車に乗つた。(p392)「十六」

以上、九例のうち例IV、V、VI、IXの四例はいずれも同行者が居る用例である。この四例では、純一の心象風景は描写されていない。それ以外の例I II III VIIの五例は、結論を先に言えば、坂井夫人に結び付けた読みが可能なものであると思われる。

先ず例IIIから見よう。これは純一の下宿探しに関する描写である。純一は上野がなんとなく気に入ったため、下宿探しの時に上野にやってきて、そして大石路花を訪れる便宜をはかつて「根岸」よりも「谷中」を優先して考えた。それで、初音町に下宿を決めた。ここで忘れてはならないのは、その後登場する

坂井夫人の家は根岸にあり、作品の中でも純一が坂井夫人の家へ行くことを、よく〈根岸のほうへ行く〉という表現で表わしていることである。しかし、ここでは純一が優先して考慮したこととその後の結果は、反対になったことに注意を促したい。それは、初音町に下宿を決めた純一は、「四」で触れたように一回しか大石路花を訪れなかったし、なお、久しぶりに大石路花を訪れたのも、大石路花が小石川に下宿を変えた後の事である。このように、「三」で純一は、大石路花を訪れる便利をはかって、根岸のほうよりも、谷中の方を選択した。だが、その後、頻繁に純一が谷中の方へ足を運ぶ気配は、一向に見られない。かえって、「九」になると、坂井夫人との出合をきっかけにして、下宿選択の際に選ばなかった根岸の方へ、純一がよく出向くようになった。いわば、配慮したことと結果が全く違うという設定は、結局作者の意図に帰着すべき所である。そこに裏返しの手法が認められる。

また、こういった裏返しの手法は、〈上野がなんとなく気に入った〉の曖昧な伝え方にも見られる。この点について、更に例ⅠⅡの例文と一緒に考えた上で結論を出そうと思う。

前後になるが、例ⅠⅡの二例を見よう。例ⅠⅡでは、上野の山を見ようと思う純一の気持ちは、大石路花を訪ねるために抑えられてしまった。結局、純一は例Ⅶの所で、やっと上野の山を歩いて見ることになった。特に、「十四」では、二回目に坂井夫人の家へ行く前のことを整理してみると、前夜上野の山を歩き、そして翌日お雪の訪問を受けて、それから下宿を出て再び上野の山を回ってから坂井夫人の所に向かったという三つのステップを踏まえた後、やっと坂井夫人への訪問に踏み切ったのである。要するに、上野の山を上って景色を眺めることによって、純一の理性による自己制御の一面は弱まり、坂井夫人に近付こうとする意欲が高まるばかりとなった。また例Ⅷでも、純一が上野の山を上って眺めようとする対象は、やはり坂井夫人であるということは、左証として挙げられる。

このように、最初一度見ようと思ったが、見なかった「上野の山」は、結果

的に坂井夫人と深いかかわりを持つものとして意味づけられており、坂井夫人に惑わされた純一が理性との闘いを試み、坂井夫人に抵抗し続ける、最後の余地を与えた場所として位置づけられる。それ故に、決して、例Ⅲで〈上野がなんとなく氣に入った〉と言ったような表面だけの意味でないことが確認できる。これも裏返しの手法と言える。

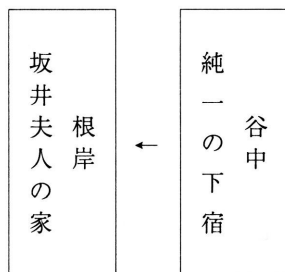
また、作中、純一は二回ほど坂井夫人と性的関係を結んだが、この二回の体験に関するアプローチの仕方は次のように分析できる。

第一回目純一が坂井夫人を訪れた時、作中、〈家は直ぐ知れた〉(p337)とあるように、坂井夫人の家を探すのは、純一にとってさほど難しくなかった。なお、この第一回目の体験では、純一のいる空間と、坂井夫人のいる空間との間に、純一の訪問によって、通路のようなものが出来て、その間を妨げる要素は存在しない。そしてこの体験を振り返って〈なに、未亡人だ〉と叫んだ純一においては理性がまだ幅を利かせていると推測される。

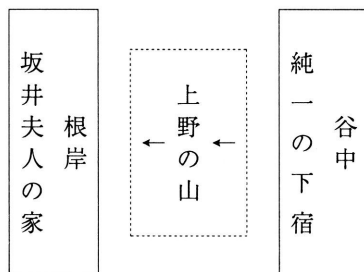
第二回目は、第一回目から二十日ぐらい経った後の事である。しかし、今回は、第一回目のように真っ直ぐに坂井夫人を訪ねたのではなく、「上野の山」を歩き廻ってから、訪問に踏み切ったということに注目したい。構造化に見ると、純一のいる空間から、坂井夫人のいる空間に互するには、純一の訪問によって出来た通路の途中に、「上野の山」のもう一つの空間が設けられる。第一回目と比べて、第二回目には理性の再チェック（「上野の山」の設置）が仕掛けられている。にもかかわらず、そこを突き抜けた途端、もう情欲に溺れ、理性的な反省は、幅を利かせなくなる。〈なに、未亡人だ〉という主人公の叫び声も聞こえなくなった。

さて、この二回の体験を構造図にすれば、次の通りである。

A：第一回目の体験の図式



B：第二回目の体験の図式



第一回目は二つの孤立する空間の間が、通路によって連結されたのに対して、第二回目は二つの孤立する空間を連結するはずの通路の途中に、さらに一つの空間が出来て連結する前に引き留める作用があったのである。対象者に接近するアプローチに関しては、前者は一直線に進行するパターンであるのに対して、後者は一時停止し、その後に進行するパターンであると言える。

要するに、「上野の山」が描かれる意味は、坂井夫人に惑わされた純一が理性との闘いを試み、坂井夫人に抵抗する最後の余地を与えられる場所ということにある。換言すれば、「上野の山」は純一の迷いを確かめる場と言えよう。

さて、「上野の山」の意味を参照した上で、再び最初に登場する「雲」に戻ってその意味を検討しよう。

最初に登場する「雲」は「上野の山」の直前に配置されている。今、見たように「上野の山」は、純一と坂井夫人の関係において、重大な意味を持つものである以上、「雲」もまた坂井夫人との関わりの中で重要な位置を占めていると言えよう。それはその後登場する第三、四回目の「雲」がいずれも坂井夫人と切り離して考えられない関係にあるからである。

「上野の山」と共に出た最初の「雲」は、引き続いて登場する「雲」に見られる坂井夫人との密接な関係を引き出す予兆として設定され、それだけに大事なものになる。一見すれば最初の「雲」は、単なる天気描写のようであるが、実は、坂井夫人の登場を暗示し、その後二人の関係を予告する伏線の役割を果

たしたものだということは、見逃せない。

3. 再び「雲」をめぐる（第五回から第九回まで）

前述したように、お雪の訪問を受けたのち、純一は再び坂井夫人を訪ねた。先に挙げた第五・六回目の「雲」は、このお雪の訪問の時に描写されたものである。このように肝心な場面に、「雲」を登場させるという意味は問うべきものである。

⑧雲の絶間から、傾き掛かつた日がさして、四目垣の向うの檜の影を縁の上に落じてゐたのが、雲が動いたので消えてしまった。（p375 傍点筆者）と描かれる通り、天気描写として読み取れる。だが、純一の抑えられた坂井夫人への思いが再び燃え立つという心境の変化に照合すれば、ここには、より深い意味が潜んでいることに気付く。

純一はお雪の訪問を受ける前夜、「上野の山」で理性と坂井夫人の誘惑との闘いを試みて、その誘惑に打ち勝った。とは言え、坂井夫人が純一を迷わせるこの存在であることに変わりはない。純一の理性が一時的な成功を収めたこの時に、〈雲の絶間から、傾き掛かつた日がさして〉という天気描写を、〈坂井夫人の誘惑（雲）の絶間から、純一の理性の光（日）がさして〉と置き換えることは、可能であろう。

次に、〈雲が動いたので消えてしまった〉の描写を見よう。まず、純一の内面からの衝動に目を向ける。

⑨お雪さんが此間に這入つた時から、自己の身の内に漂つてゐた、不安なやうな、衝撃的なやうな感じが、拂ひ盡されたやうに消え失せてしまった。（p379 傍点筆者）

お雪が部屋に入ってきた時に、純一は内面からの衝動を感じている。しかし、高まっている衝動を抑えた純一は、お雪を保護しようと思う一方で、坂井夫人の方にその衝動を向けたのである。すなわち、純一の衝動はお雪に向けて進行する途中で、急に純一によってブレーキが掛けられると同時に、誘惑の源である坂井夫人の方に転換されたのである。

以上の事を踏まえて〈雲が動いたので消えてしまった〉の描写を検討しよう。ここで消えてしまったのは、とりもなおさず日のことである。すなわち、「日」が「雲」に隠されていることになる。特に〈雲が動いた〉の描写に注目すると、その言葉に隠されている二重の意味が見い出せる。それは、先に言ったように、内面から衝動の働きによって、理性が隠されることと、お雪に向かう筈の衝動が途中で坂井夫人に転換されたことの二点である。結局、純一の内面からの衝動は、坂井夫人の一身に帰結したことになる。言うまでもなく、純一の内からの衝動と、坂井夫人の誘惑は、結果から見れば、実は表裏一体となっているものである。

従って、第五・六回目に登場する「雲」は、純一の理性が坂井夫人に対して、抵抗したが、挫折した心象描写を明らかにするキーワードであることが確認できる。

さて、「二十」に書かれている第七回目の「雲」に移る。その「雲」を検討する際、まず、その前夜に見た夢を確認する必要がある。この夢を見た後、純一は〈體には慾望の火が燃えてゐた〉（p417）というのである。その夢を二段落に分けて要約しよう。

第一段落 — 友人の大村と一緒に旅行して大宮で休んでいた場面。そこに水が迫り来ていた。

この第一段落について説明する。実際に、純一は大村と一緒に大宮に行ったことがあるが、ここでは、これを夢という場面設定の中で再現している。それは、始めて坂井夫人と肉体関係が出来た翌日のことであった。その日、女性観のことが話題となった。そして「娼妓の型」「母の型」と述べた大村の話を聞いて、純一は〈坂井の奥さんが娼妓の型の代表者〉（p365）であるように認識した。この認識が、かなり深く純一の心に刻み込まれていたかのように、大宮行きのことが夢の形で登場している。なお、大宮に行く前に純一から持ち出された「男子の貞操」の問題について、大村は〈僕は保つ方を賛成する〉（p354）と述べていた。このように、本能の策励をうまくコントロールするこ

との出来る大村のことは、純一の夢の中に〈動かずに立つてゐる。女はゐない〉（p416）の形で再現されている。

第二段落——女性に迫り近づこうとする場面。その女性の顔は、おちゃらから坂井夫人へ、そしてお雪に変わった。

夢の中で純一は「水」に追われて、走り回った結果、AdamとEvaとの二人きりの世界に入った。ここで言っている「水」は、欲望のかたまりとして理解しても良からう。このように通常欲望に駆られ、最初に目当てにされるのは、娼婦であろう。それは、純一の出会った女性では、芸者の「おちゃら」に当たる。しかし、おちゃらが芸者でありながら、事実上、純一と何の関係も持たず、通り過ぎていった。次いで純一の夢に姿を現わしたのは坂井夫人である。坂井夫人は、唯一、純一が性体験をした対象である。それから、理性の覚醒を伴い、純一の夢に現れた顔がお雪になった。

要するに、純一の夢に現れた顔が、おちゃらから坂井夫人へ、そしてお雪に至るというプロセスを説明するには、純一の欲望を無視できない。換言すれば、純一の見た夢は、欲望によって描かれた物語だと見ても差し支えない。そののみならず、純一には坂井夫人に対する未練があるということが十分に読み取れる。

次は、純一に坂井夫人に対する未練があるという点を前提にし、引き続いて登場する第七回目の「雲」を見よう。

⑩初音町の往來へ向いた方の障子に鼠色の雲に濾された日の光が、白らけた、

殆ど色神に觸れない程な黄いろを帯びて映じてゐる純一が部屋へ、大村莊之助が血色の好い、爽快な顔付きをして這入つて來た。（p418 傍点筆者）

ここでは、日差しが「雲」を通過して届いているという表現がされたという点に注目したい。大村が伝えてきた活気と対照的に、陰気なのは、純一の部屋だけではなく、純一の心持ちであるとも読み取れる。何故、純一の心持ちが陰気なのかと言うと、それは、見果てぬ夢の名残を惜しんでいたからであろう。換言すれば、坂井夫人に対する未練があることを認識したからである。このよ

うに、坂井夫人が決して自分の恋愛の対象ではないことを知りつつも、本能的な衝動を満たすには、自然に坂井夫人の方へ思いを寄せた純一は、理性では坂井夫人の誘惑に対抗すべきだと分かっているが、現実には、坂井夫人に未練があることをも承知している。見果てぬ夢から醒めた純一には、こういった矛盾は知り尽くされたことであるため、純一の心持ちは、部屋と同じように陰気そのものであることが理解される。そうすると、「雲」の描写は、まさしく純一の心象風景を再現するものであろう。坂井夫人の誘惑（雲）を見抜いた理性（日の光）は、いかにも弱く見えて、その結果、純一の心持が陰気になったのである。

それから、第八回目の「雲」は、純一が坂井夫人の後ろを追い、箱根行きの汽車に乗って読んだ『盗人』を纏めた記述に見られる。

⑪金を盗んだマリイ・ルイズが探偵に見顯されさうになつたとたん、此外に懸想してゐる青年Fernandが罪を自分で引き受ける。憂悶の雲は忽ち無辜の青年と、金を盗まれた両親との上に掩ひ掛かる。(p442 傍点筆者)

『盗人』では夫を持っているマリイ・ルイズは、浮気っぽい女として描かれ、青年の恋を託す対象となっている。この「憂悶の雲」とは、恋を託すべきではない対象に恋を託せば、青年の悩みが尽せないことを意味するであろう。こうして見れば、純一対坂井夫人の関係は、正しく青年対マリイ・ルイズの関係に投影していると考えられる。いうまでもなく、純一が悩まされることも当然なのである。この部分に次いで、箱根に到着した後、夫婦を思わせるほど親しい坂井夫人と画家岡村の間柄を見て、純一が寂しさを感じる場面が描かれる。ここの「雲」は、既に純一の恋の行方を暗示していると言える。

最後の「雲」は、純一が坂井夫人と画家岡村の親しい間柄を見抜いた後に登場している。

⑫（純一は）いよいよ書かうと思ひ立つと共に、現在の自分の周囲も、過去に自分の関して來た事も、總て價值を失つてしまつて咫尺の間の福住の離れに、美しい肉の塊が横はつてゐるのがなんだと云ふやうな氣がするので

ある。紅が兩の頬に潮して、大きい目が耀いてゐる。純一はこれまで物を書き出す時、興奮を感じたことは度々あつたが、今のやうな、夕立の前の雲が電氣に飽きてゐるやうな、氣分の充實を感じたことは無い。(p465-466 傍点筆者)

この部分について、まず〈純一はこれまで物を書き出す時〉の「物」の意味を明かにしてから、「雲」の含んでいる意味を考える。

『青年』の全篇を通して見る限り、「二十四」までは、純一が何か書いた記述が、一つもされていない。ただし、敢えて日記を創作の範疇の中に入れて考えれば、せいぜい「十」「十五」で、日記の形で坂井夫人との交わりのことが挙げられるに過ぎない。本格的に純一が物を書き始めたのは、やはり「二十四」で坂井夫人の誘惑から目を醒ました頃になると見られる。こういった点に基づいて、〈純一はこれまで物を書きだす時〉の「物」は小説ではなく、日記と解釈した方が妥当である。

さらに、「物」を日記に書き換えて試みると、純一はこれまで坂井夫人との交わりを日記に書き出す時、興奮を感じたことは度々あったが、というようになる。そして、その続きもこれを受け継いで解釈すべきである。

⑫今のやうな、夕立の前の雲が電氣に飽きてゐるやうな、氣分の充實を感じたことは無い

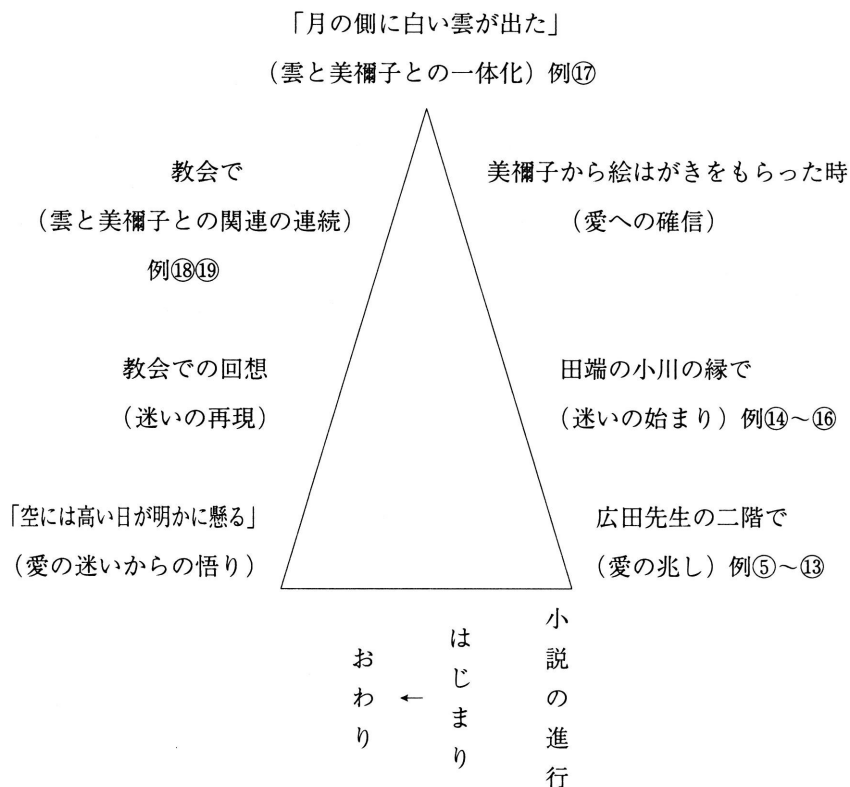
とあるように、純一の充実した氣分を描写するのに、〈夕立の前の雲が電氣に飽きてゐる〉と、物理現象を借用した比喩がされている。今見てきたように、純一の性体験には、「雲」(坂井夫人の誘惑)が欠かせない要素であった。だが、これは坂井夫人の誘惑に付き纏われてきた純一がやっと立ち上がって、それに対して、全面的に対抗しようとすることを意味するであろう。相手が強ければ、それなりに対抗する手ごたえも感じられ、充実感が伴われる。と共に坂井夫人の誘惑を乗り越えて、理性が主導権を握った純一の再生の兆しが見えてくる。この点は、最後に作中時間を元日(一月一日)に設定する意味と重なっている所から読み取れる。要するに、ここの「雲」は、物理現象から借用した比喩表現

だけにとどまらず、純一が全面的に対抗する対象となり、その姿が消される前に上りかかる勢いのある坂井夫人の誘惑をさすと見られる。

以上、『青年』について、「雲」を主軸にし、それと関連して純一と坂井夫人との交渉を表す場面で重要な位置を占める「上野の山」を副軸にして考察してきた。その結果、「雲」は純一の心象風景を象徴する指標であることが判明した。また、「雲」は、純一を惑わすものである坂井夫人を象徴しているとも言える。それにつけ加えて、「雲」が「日の光」と持つ緊張関係は、そのまま純一の理性と坂井夫人の誘惑との相互的な関係に投影されている。時には純一の理性が覚醒する気配が見られるが、しかし、大半は「雲」が主導の座を占めている。純一と坂井夫人との関係の展開において、「雲」はいわばキーワードのような役割を果たしていると結論づけられる。

三 『三四郎』における「雲」^③

『三四郎』の中には、「雲」が19回使われている。その「雲」が登場している内容を表（四）に纏めた。表の通り、『三四郎』に登場する「雲」には、特徴があると認められる。それは表（四）の通り、「雲」の話題が出るのは、作中人物のうち、野々宮、三四郎、美禰子の三人の間に限られていることである。作品のドラマは、三四郎がたえず美禰子と野々宮との関係を観察するという形で展開していく。要するに、この三人が三角関係にあることは明瞭なのだが、このような関係にある三人に限って「雲」の話題が出ていることから見て、「雲」は意図的に選ばれた景物であると言えよう。すなわち、「雲」によって、三四郎の美禰子に対する恋が浮き彫りにされていると言える。この点が、まさしく小説中の特定の場面に「雲」を登場させることの意義である。「雲」をめぐって、三四郎の美禰子への思いを分析すると、次のようなピラミッドの図が形成されている。



図の通り、ピラミッドの頂点は、「雲」と美禰子との一体化の境地である。この境地に至るコースは、愛の兆しから、愛の迷いへ、そして愛への確信を経て登って来たものである。しかし、「雲」と美禰子との一体化の境地に至った途端、この道は、すぐ美禰子の結婚のために方向を変えて失望に転化するようになっている。けれども、失望に変わった三四郎の美禰子への思いは、かろうじて「雲」を通して美禰子との関連を継続させている。ところが、もう一度美禰子と「雲」を見た過去を振り返ってしまうと、美禰子への未練が再び生じ、美禰子への迷いが深まってしまう。だが、最後に、迷いの中で美禰子を再認識した上で、彼女への愛の迷いから目覚めたというのである。

このように、ピラミッドの頂点に向かって、上がりまた下がる行程は、まさ

しく三四郎の美禰子への愛を表示しているものである。『三四郎』における「雲」は、すなわちこの行程を進行させる役割を果たして、三四郎の憧れの対象である美禰子を象徴しているものと認められる。

四 結論

以上、「雲」を中心に『青年』と『三四郎』を考察してきた。その結果に基づいて、それぞれの類似点と相違点を以下のように纏めたい。

①類似点 — 『青年』と『三四郎』における「雲」の役割が類似している。

『青年』では、「雲」を指標として、主人公の純一と坂井夫人との関係の展開をとらえることができる。『三四郎』でも、同じ傾向が見られる。それ故に、両作において「雲」はキーワードのような役割を果たしていると言える。

②相違点 — 『青年』では、「雲」は純一を惑わして彼の本能的な衝動が直進する対象である坂井夫人を象徴している。これに対して、『三四郎』では、「雲」は三四郎の憧れの対象である美禰子を象徴している。両者の「雲」は、関心を持つ対象を象徴するという点で共通している。しかし、本質において、両作の「雲」は、相違している。『三四郎』にある「雲」は、あくまでも上京したばかりの、世間にあまり慣れていない青年の純粋な恋心を託す対象を象徴している。これに対して、『青年』にある「雲」は、理性と闘う意味をも含んだ上での、誘惑の対象を示すものとして取り扱われている。簡単に言えば、『三四郎』の「雲」の本質は、単純なものであるのに対して、『青年』のは、複合体のようなものであるということである。こういった特徴が、両作の相違点として認められる。

鷗外が、『三四郎』を読んで、そこで「雲」が果たしている役割を見抜き、自作の『青年』に導入したとは、はっきりと言えない。しかし、鷗外の小説作

品の中で、『青年』だけが、特徴的な「雲」の表現を持つものであるということから考えてみれば、結果的に『青年』での「雲」の役割は、『三四郎』での「雲」の役割と類似していると言える。従って、この点において、両作の間には深いかわりがあると認められる。と同時に、鷗外と漱石とは、用法に微妙な差が見られるとは言え、「雲」に関心を持ち、憧れの対象や関心の対象を「雲」に託して表現するという手法を用いている点で一致していると言えよう。

テキスト

1. 『鷗外全集』第六巻 岩波書店 昭和47年4月
2. 『漱石全集』第四巻 岩波書店 昭和50年3月

注

- ①この点に関しては、大屋幸世が「雲を見る目—鷗外の日記から」（『文芸と批評』昭和47年3月）で指摘している。
- ②漢詩をめぐる鷗外と漱石との比較については、「漢詩における鷗外と漱石との違い—「雲」を中心にして—」（『鷗外』52号 森鷗外記念会発行 平成5年1月）で詳論した。
- ③『三四郎』における「雲」に関しては、拙稿「漱石の漢詩と小説とのかかわり—『三四郎』を中心に」（1989年13回日本国際文学研究集会 国文学資料館主催）で詳しく論じた。

討議要旨

長谷川泉氏から、統計的な整理をする場合は、基本となる材料の読み方を誤らないように、との助言がなされた。平岡敏夫氏から、これまでの研究史における「雲」についての言及を十分にふまえるように、との指摘があった。

表（一） 鷗外全小説作品における「雲」の箇所

内 訳 通 番	作品名	分 類		使用 合計 数	全集に当該する箇所（*・#の 付いているのは、Aに当たるもの）
		A固有名詞 人名・地名	A以外		
1	舞姫		3	3	巻一 P426.427.441.
2	うたかたの記		3	3	巻二 P8.19.20.
3	玉置両浦嶼		3	3	巻三 P201.201.203.
4	日蓮聖人辻説法		1	1	巻三 P278.
5	有楽町		1	1	巻三 P295.
6	キタ・セクスアリス	2	1	3	巻五 P120.125.164. * *
7	木精	1	1	2	巻六 P243.246. *
8	杯		2	2	巻六 P84.86.
9	肖年		9	9	巻六 P279.299.344.368.375.375.418.442. 466.
10	あそび		1	1	巻七 P247.
11	雁		2	2	巻八 P564.566.
12	百物語		1	1	巻九 P138.
13	灰燼		2	2	巻九 P149.164.
14	興津彌五右衛の遺書	1		1	巻十 P581. #
15	安井夫人	2		2	巻十五 P549.559. * #
16	山椒大夫	2		2	巻十五 P678.681. * *
17	津下四衛左衛門	5		5	巻十六 P42.42.43.52.53. * * # * *
18	高瀬舟		2	2	巻十六 P225.225.

49	瀧江仙斎	6	1	7	巻十六P276.355.395.395.435.494.497. * * * * *
20	勝阿彌の手紙	3		3	巻十六P527.527.527. * * *
21	伊澤蘭軒	93		93	巻十七P45.45.45.46.51.51.53.53.56.63.63 * * * * * 66.70.70.73.73.77.77.80.82 # # # # # 94.99.103.103.104.104.104.106. # # # # * * * 109.111.124.128.128.150.155.156. # * # # # # * 156.156.156.158.168.173.174.179. # # # # * * * 179.179.179.187.203.221.221.222 * * * * * 222.222.222.222.222.223.225.230. * * * * * 233.244.263.263.284.289.289.294. # * # # * * * 295.301.305.305.307.320.320.324. # * # # * * * 339.340.361.398.418.418.418.434. # # # # # * 434.435.435.649.688.741.741. * * * # # * *
22	小嶋實崇	2		2	巻十八P128.128. * *
23	北條露亭	32		32	巻十八P143.143.163.188.190.196.228.229. * * # * * * * 229.229.229.260.267.267.269.286. * * * # # # # 301.364.404.412.418.420.422.424. # # # # * * * 424.437.441.444.473.483.500.500. * # # # # * # #
24	露亭生涯の末一年	3		3	巻十八P522.567.577. # # #
合計		152	33	185	

- (説明) 1. 上は昭和四十六年以後に配本した『四外全集』全三十八巻(岩波書店)によって調査した結果。
2. *の付いてあるのは、人名・地名・書名・建物などの固有名詞・普通名詞のものである。
3. #の付いてあるのは、作中の引用文に見られる詩句または言葉である。
4. 右の表に表示していない作品は、「髪」が見当たらない。

表（二）『青年』における「雲」の箇所

回数	作 中 時 間	内 容 要 約	雲の登場	「上野の山	坂井夫人との関連
巻	十月二十何日か (10.26)	大石路花を訪問。途中知り合いの瀬戸に会った	例①	I II	◎
貳	同上 (10.26)	大石の部屋で			
参	初めて大石を訪ねた翌日 (10.27)	家探し		III	◎
四	天長節 (11.3)	お雪からの訪問			
五	同上 (11.3)	雑誌を読んだり、故郷のことを思い出したりする	例②		
六	同上 (11.3)	瀬戸に誘われて講演会に行く。大村莊之助と出会った		※ IV	
七	同上 (11.3)	拊石の講演			
八	同上 (11.3)	講演会の帰りに大村莊之助と一緒に			
九	十一月二十七日 (11.27)	有楽座で坂井夫人と出会った			
十	十一月三十日（日記の形で述べる）	第一回目坂井夫人と性体験をした	例③		◎
十一	翌日 (12.1)	訪ねに来た大村に男子の貞操について質問した		※ V	
十二	同上 (12.1)	大村と一緒に大宮に行って彼に女性観について質問した	例④	※ VI	◎
十三	十二月も半ば過ぎてゐる (12.15→)	小石川に引っ越した大石路花を訪問			
十四	十二月は残り少なくなった	十二月二十一日に上野の山を歩いた。そして十二月二十二日にお雪からの訪問	例⑤ ⑥	VII	◎
十五	十二月二十二日（日記の形で述べる）	第二目坂井夫人と性体験をした		VII	◎
十六	十二月二十五日になった	忘年会		※ IX	

十七	同上	(12.25)	忘年会の会場の有り様。芸者のおちらに 出会った			
十八	同上	(12.25)	忘年会の帰り			
十九	翌朝	(12.26)	大宮へ行くことを夢で再現する			
二十	同上	(12.26)	大村からの訪問	例⑦		◎
二十一	同上	(12.26)	大村と散歩する時に、三枝という女に出会 った			
二十二	十二月三十一日 (12.30, 12.31)		国府津の一夜（坂井夫人のいる箱根に向か う途中）	例⑧		◎
二十三	同上	(12.31)	坂井夫人とその連れ合いに道端で出会った			
二十四		(12.31, 1.1)	純一の坂井夫人に対する締め	例⑨		◎

説明：①＜雲の登場＞に示してあるのは、『青年』に登場する「雲」用例の順番である。

②＜上野の山＞に※印が付いているのは、同行者がいる場合の用例である。

③＜坂井夫人との関連＞に◎印が付いているのは、深読みをすれば、その「雲」または「上野の山」の用例は、坂井夫人とのかかわりが見られるのである。

表（三）『青年』における「雲」の用例

内容 順番	本	文	坂井夫人との 関連
例 ①	灰色の雲のある處から、ない處へ日が廻つて黄いろい、寂しい暖かみの、ある光がさつと差して來た。坂を上つて上野の一部を見ようか、それでは餘り遅くなるかも知れないと、危ぶみながら佇立してゐる。 (p 279-280 傍点筆者)		坂井夫人の登場を暗示
例 ②	そこで畫家は死に瀕してゐる。體のうちの臓器はもう運轉を停めようとしてゐるのに、畫家は窓を開けさせて、氷の山の顚に棚引く雲を眺めてゐる。 (p 299 傍点筆者)		純一に自然と違つた「雲」の存在があり
例 ③	あの時己は理性の光に刹那の間照されたが、齒牙の相撃たうとするまでになつた神經興奮の雲が、それを忽ち蔽つてしまつた。その刹那の光明の消えるとき、己は心の中で、「なに、未亡人だ」と叫んだ。 (p 344 傍点筆者)		誘惑の源 (坂井夫人の存在)
例 ④	鴉が一聲啼いて森の方へ飛んで行つた。その行方を見送れば、いつの間にか鼠色の薄い雲が空を掩うてゐた。(p 368 傍点筆者)		誘惑への未練
例 ⑤	雲の絶間から、傾き掛かつた日がさして、四目垣の向うの檜の影を縁の上に落してゐたのが、雲が動いたので消えてしまつた。 (p 375 傍点筆者)		誘惑との闘い
例 ⑥	初音町の往來へ向いた方の障子に鼠色の雲に掩された日の光が、白らけた、殆ど色神に觸れない程な黄いろを帯びて映じてゐる純一が部屋へ、大村莊之助が血色の好い、爽快な顔付きをして這入つて來た。 (p 418 傍点筆者)		誘惑との闘い
例 ⑦	金を盗んだマリイ・ルイズが探偵に見顯されさうになつたとたんに、此外に懸想してゐる青年 Fernand が罪を自分で引き受ける。憂悶の雲は忽ち無事の青年と、金を盗まれた両親との上に掩ひ掛かる。 (p 442 傍点筆者)		誘惑の勝利を暗示
例 ⑧	(純一は)いよいよ書かうと思ひ立つと共に、現在の自分の周圍も、過去に自分の関して來た事も、總て價值を失つてしまつて咫尺の間の福住の離れに、美しい肉の塊が横はつてゐるのがなんだと云ふやうな氣がするのである。紅が兩の頬に潮して、大きい目が耀いてゐる。純一はこれまで物を書き出す時、興奮を感じたことは度々あつたが、今のやうな、夕立の前の雲が電氣に飽きてゐるやうな、氣分の充實を感じたことは無い。 (p 465-466 傍点筆者)		誘惑との全面的対抗 (坂井夫人への恋の諦め・純一の再生)

表（四）『三四郎』における「雲」の用例

内容 順番	本 文	美禰子との関 連
例①	其の気持のうちに薄雲の様な淋しさが一面に廣がつて來た。（P29）	
例②	青い空の静まり返つた、上皮に、白い薄雲が刷毛先で掻き拂つた痕の様に、筋連に長く浮いてゐる。（P33）	三角関係の予兆
例③	三四郎は仰いで半透明の雲を見た。（P33）	○
例④	其の中に遠い心持のする眼がある。高い雲が空の奥にゐて容易に動かない。けれども動かすにも居られない。たゞ崩れる様に動く。女が三四郎を見た時は、かう云ふ眼付であつた。（P62）	
例⑤	私は先刻からあの白い雲を見て居りますの。（P97）	美禰子への愛の兆し
例⑥	成程白い雲が大きな空を渡つてゐる。（P97）	○
例⑦	空は限りなく晴れて、どこ迄も青く澄んでゐる上を、綿の光つた様な濃い雲がしきりに飛んで行く。（P97）	○
例⑧	風の力が烈しいと見えて、雲の端が吹き散らされると、青い地が透いて見える程に薄くなる。（P97）	○
例⑨	あの白い雲はみんな雪の粉で、下から見てあの位に動く以上は、颶風以上の速度でなくてはならないと。（P97）	○
例⑩ ⑪	何故でも、雲は雲でなくっちゃ不可ないわ。かうして、遠くから眺めてゐる甲斐がないぢやありませんか。（P97）	○
例⑫	美禰子は竹の格子の中から、まだ空を眺めてゐる。白い雲はあとから、あとから、飛んで来る。（P98）	○
例⑬	車の音の動くのが、白い雲の動くのに関係でもある様に耳を澄してゐる	○
例⑭	透き徹る藍の地が消える様に次第に薄くなる。其上に白い雲が鈍く重なりかゝる。（P131）	美禰子への愛に対する迷い
例⑮	重なつたものが溶けて流れ出す。何處で地が盡きて、何處で雲が始まるか分らない程に頼い上を、心持黄な色がふうと一面にかゝつてゐる。（P131）	○
例⑯	美禰子は又遠くの雲を眺め出した。（P132）	○
例⑰	三四郎はふんと云つて、又高い月を見た。月の側に白い雲が出た。（P226）	美禰子との一体化
例⑱	空に美禰子の好きな雲が出た。（P304）	美禰子への未練
例⑲	雲は羊の形をしてゐる。（P304）	○

説明：①○印が付いている所は、その直前の美禰子との関連の続きだと読み取れるものである。